

特集 男女共同参画推進本部座談会

男女共同参画推進本部（以下、本部）はこの2年間の活動を総括するため、『2008年版東京学芸大学男女共同参画白書』を作成していますが、白書ではうかがいきれない本部で活動しての思いや今後への期待をお伝えするべく、本部員有志による座談会を行いました。

男女共同参画って? 「できる人がやる」が基本

- A: 今日はお集まりくださいましてありがとうございます。今日は本部員の本音を交えての座談会ということで気楽に、忌憚ないご意見をよろしくお願ひいたします。まずは、本部についてどのような感想を抱かれましたか?
- B: こんな活動をこんなに真剣になって行っているところがあったのかと驚きました。
- C: 私は本部には途中から加わったのですが、最初はどんな組織なのかわかりませんでした。みんな懸命に活動しているから、自発的な会なのかと誤解してしまっただけです。でも、事務職員が大学教員と対等に口をきける組織としては、この本部が初めてじゃないかと思いました。
- B: 私も本部員として活動していく中で、他の本部員の皆さんの情熱に感化されてしまったように思います。これまで男性優先の職場に長くいたこともありますが、私もこの本部で活動したことで、男女共同参画に関してのこれまでの自分の認識は古かった、これからはもっと男性と女性とが対等のパートナーになる社会を作らねば、ということ強く思いました。
- D: この大学でも男性による女性バッシングみたいなものがあると思いますか?
- C: 女性の昇進や女性からの提案に対しては、思いこみかもしれませんが軋轢を伴うようにも感じられた頃に比べると、現在は急速に良い方向に変わりつつあると思います。事務職員の人事などでも、女性だからという基準とか、年功序列とかではない人事が始まっていると思います。今後の人事はもっと適材適所になっていくんじゃないでしょうか。
- B: ただし、何が何でも男女平等というのはちょっと、とも思います。たとえば、行事の会場設営などで男性が進んで力仕事を引き受けてくれた場合、女性はその力仕事に無理矢理加わるのではなく、また違うところで積極的な気遣いをするというようなスタイルがいいように思います。
- C: 私はいつも「男女平等」と「男女共同参画」の区別が曖昧だったんですが、この本部に来てから男性だから、女性だからではなく、「できる人がやる」が人間として基本だと納得しました。男女に関わらず、相手を対等に見て、そして能力のある方は頼りにするようになっていきます。
- D: 人事という点では、この本部の前身である男女共同参画推進プロジェクトを立ち上げた村松先生が初の女性理事・副学長に就任されましたね。
- C: はい、村松先生がそのような立場になられたのはうれしいですね。でも、それは女性だからうれしいというのではなく、いつも冷静に、周囲を穏やかに見守ってくれる、個人の人柄によると思います。ジェンダーを研究されてきたから、そのようなことに自然と意識がいくのでしょうか。大学全体がこのように、男女という枠ではなく適材適所になっていけば、仕事もずっとやりやすくなると思います。
- A: 村松先生は真摯に対応してくれますし、こちらの意見を活用してくれますものね。

家庭での男女共同参画 ゴミ出しはだれがする？

A：ところで、みなさんのご家庭での男女共同参画はいかがですか？

B：パートナーがそんなことを言うわけではないのですが、家事は女性がやるものという意識が自分にあって。帰って食事の用意をするのに「遅くなっちゃった、ごめんなさい」と言ったり、「ゴミを出して」と口にするのがストレスだったりね。ただ、仕事が忙しいとどうしても手が回りきらなくなってしまうと、それで負い目を感じてしまったりします。でも、そんな負い目を感じる自分が偏狭に思えてしまったりして。そんなジレンマをパートナーは気づかないの。

C：現在の日本はまだ過渡期なんだと思います。ですから意識もなかなか変えられないんでしょうね。政府主導の男女共同参画活動もまだ3年程度です。でも、若年層はすでに意識も変わりつつありますよ。たとえば、ウチでは「家族はチーム」がモットーで、家族というのは共同生活体なんだから、家事でもできる人がなんでも担当するようにしています。でも、まだ長男は認識が固いかな。

D：逆に今の学生たちの方が男女に関する認識は古いままのような気がします。少子化の影響で、子供に家事をやらせなくなったことが原因でしょうか。やはり、子供にいろいろなことをやらせること、そして親の指導が大事なんだと思います。

A：私の父親は自分の責任として家事をやる方でした。父親は、女性が志をもちながらそれを実現できず、やる気をなくすのが一番いけないという意見の持ち主でした。それが現在の私の意識を作ってきたと思っています。

D：男女共同参画の意識に関しては地方による差も大きいですね。たとえば、ニュージーランドでは男性が家事を行うのは当たり前で、その社会に入っていくと日本人もすぐにその社会に従うんですね。男の人が「俺がやる！」とゴミを出したり。

A：日本でもはや「男性が家事をしないとかわい」という社会になるといいですね。

本部の活動について これからも地道にアクティブに…

B：本部の活動と言えば、先日の映画（注：「心理学者・原口鶴子の青春」）の上映会の効果は大きかったと思います。地域の方々も多くお見えになりましたし、そういう点でも貢献したでしょう。

C：映画上映を含めて、本部が開催しているフォーラムは効果が大きいと思いますよ。肩ひじはらない気楽な雰囲気、多様な方が参加してくれていますし、それを通して男女共同参画活動を認識してくれることになります。そして、その影響は学内だけでなく、映画の上映会のように地域にも拡大していきますから。

A：現在の本部では、次世代育成支援を主要な活動テーマにしていますが、フォーラムでは「次世代育成がどうして男女共同参画につながるかわからない」という質問も出されましたね。日本でも、まだ子育ては女性という認識がありますが、それを一部大学が肩代わりすることで男女が均等に参画できる社会を作っていくということなんだろうと思います。

C：本部では保育所設立の検討をしていますが、その他にも一時保育や地域との連携など、次世代育成に関する地道な支援策も検討していくべきでしょうね。仕事ができる環境を作っていくそのような地道な努力が、大学教職員や学生の意識改革につながっていくんだと思います。

B：今の本部の活動は、次世代育成支援など、目の前にある課題に取り組んでいくというもののように感じました。それもいいのですが、今後は男女共同参画の目的を確認しながら、学芸大として有効な活動をしていくために、もう少し時間をかけて方策を立てる必要があると思います。

A：大学のみなさんに本部の認識をもっと深めてもらって、なにかあったら本部がある、と頼りになる存在になっていくといいですね。本部があることで、育児休暇などの権利を使いやすくなると思います。

C：本部こそ、短期的には大学の利益にならないように見える事柄、たとえば新しいスタイルの

福利厚生案などを提示することが必要かもしれませんね。私には娘がいるのですが、娘には将来、女性だからと制約がかかるような社会ではなく、男女共同参画社会で生きてほしいです。でも、そんな社会の実現には、実際には何十年とかかるかもしれません。でも、男女共同参画というのは人間としての尊厳に関わる問題ですし、あきらめないで続けていかなくてはならないことです。

- A：この活動は、人間がお互いをどう理解しあえるかという根幹の問題に関わってきますから、やはり重要ですね。
- D：本部の活動にもっと多くの皆さんに関わっていただいて、そのような意識改革を拡めていくことが必要だと思います。
- B：この本部の活動は機動的でやりがいがありましたし、今後もたくさんの方々に関与していただいて、男女共同参画の認識やその推進活動を拡大して行ってほしいと思います。
- A：そのような認識や、また本部の活動を通しての充実感は、本部員に共通のものだと思います。本部がこれからもアクティブな活動を展開することを願っています。それでは今日はありがとうございました。



コラム


中国女性の就労状況と育児システムから日本の少子化を考える

本学大学院学校心理学専攻修士課程2年 陳姣姣

10年前に、私は中国の師範大学を卒業し、広州の中学校で理科教員になったが、思うところがあり職を辞し、4年前に学芸大学に入った。将来への憧れと展望が再び膨らんできたときのわくわくした気持ちは今でも忘れられない。その後、修士課程在学中に出産し、本国の両親に子どもを預け、修論に取り組んでいる。夫も中国人で日本企業で働いており、私も日本で就職活動をした。しかし、日本での就職活動の厳しさは、想像を遙かに越えていた。小さい子どもがいるだけで、正社員の仕事が見つからない。ようやく会社の最終面接に入っても、子どもがいると伝えた途端、簡単に断られてしまった。日本の女性が中国の女性のように働きたければ、中国の女性の数倍もの犠牲を強いられると痛感した。なぜそれほど強いショックを受けたかということ、中国の大都市では、フルタイムで働かない女性がほとんどいないからである。師範大学時代の百十数人の同級生で、働いていないのは、日本にいる私だけであり、働いていないことに相当な恥ずかしさを感じる。

中国企業では残業がなく、父親がごく自然に保育園、幼稚園に子どもを迎えに行く。また、夫婦で一緒に家事や育児をしたり、平日の夕飯後に散歩や買い物をしたりする。夫婦の両親は、働き盛りの二人のために、よく孫の世話をする。外国にいても、私のように出産後、本国の両親が子どもを見るのはごく普通である。女性が出産・育児を理由に、職場を離れることもない。中国の女性の育児は、日本の女性より、心身の負担がだいぶ軽減されているのだ。2007年3月の中国国務院「女性と児童工作委員会」報告によると、中国人労働人口の約半分の45%が女性である。中国の女性は、フルタイムで働くことがむしろ当然と思っているのである。

私は、日本の少子化対策は日本人全員の責任であると思う。なぜなら、社会全体に「男女の働く権利と機会を平等にすべきである」という意識が芽生えないと、残業の実態が改善できないし、また、地域や夫婦の両親も含め、子どもを持つ女性への援助が十分でないと、少子化問題を根本的に改善できないと思うからだ。国は違っても、同じ女性として、日本女性の「働きたいが、働けない」という苦しみも味わったので、自分の国のことが少しでも参考になれば幸いである。



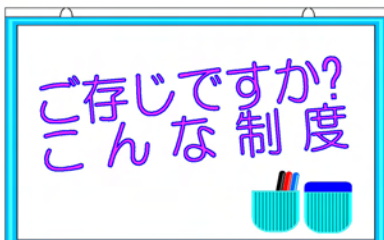
男女共同参画フォーラム

12月5日には「心理学者原口鶴子の青春」の上映会が行われ、大学内外から多くの参加者がありました。上映後の泉悦子監督のトークでは、製作の経緯や監督の思いに加えて、これまで男性社会の中で仕事をされてきた女性としてのご意見もうかがうことができました。「志があると、そこに戻っていく」「女性が本気で何かしようとするときには、男性以上の努力とチャンスと時機を待つことが大事」という言葉が印象的でした。



泉悦子監督

12月26日の「みんなで子育て～男女共同参画を拓く子育て支援大集合」では、子育て支援に取り組んでいる学内の3団体の活動が紹介され、子育てをめぐるさまざまな問題とそれに対する支援のあり方を学びました。学内外の参加者による意見交換も行われ、大学の男女共同参画が子育て支援にどう関わるかについて、あらためて考えさせられるものとなりました。



「家族が病気になったとき～子の看護休暇」

小学校に上がる前の子どもが、病気や怪我などをして看護する必要がある場合、年に最大5日まで子の看護休暇をとることができます。この休暇は日、時間、又は分単位でとることができます。

* OPGE助成のお知らせ

本学における男女共同参画を推進する活動をサポートするOPGE助成事業を、今年度に引き続き平成20年度にも実施する予定です。助成額や申請期間などは決まり次第、HP等でお知らせいたします。なお、今年度のOPGE助成事業応募要領は男女共同参画推進本部HPから見るができますので、ご参考にしてください。

* 「2008年版東京学芸大学男女共同参画白書」が発行されます

2年ぶりとなる本学の男女共同参画白書を、3月末の発行に向けて準備中です。

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学男女共同参画推進本部
●TEL/042-329-7108 ●fax/042-329-7114 ●E-mail/danjo@u-gakugei.ac.jp
●URL/http://www.u-gakugei.ac.jp/~danjo/
詳しい情報等はホームページをご覧ください。

